



いよいよ夏本番。海の透明度が高くなり、浦富海岸の海中では多くの魚たちが賑わっている様子が観察できます。夏休みに入り、海水浴やシュノーケルへ遊びに来られる方も多くなる季節です。

海へ入ると、岩壁などに多くの生物がかっついていますが、これらをじっくり観察したことはありますか？ 海では、植物の様にほとんど動かない動物が沢山生息しており、中には自由に泳ぎ回る魚に類縁が近いものもいます。今回はその動物について紹介したいと思います。

～ホヤって知ってる？～

皆さんはホヤという海の生物をご存じでしょうか？ 東北地方では、海の珍味としてマボヤが食べられ、居酒屋や鮮魚店にも出回っていることがあります。このマボヤは、養殖されているものがほとんどですが、浦富海岸にも生息しています。そもそも、ホヤとはどんな生物なのでしょう？

ホヤは海で固着生活をしながら、二枚貝のように入水孔と出水孔があり、ここに通るプランクトンや有機物をろ過して成長します。ホヤは体を「**筋膜**」という組織に覆われ、その外側に分厚い「**被囊**」に覆われています（図1）。私たちが食べているのは主にマボヤの「**筋膜**」の部分です。

浦富海岸にはマボヤ以外にも多くのホヤの仲間が生息しておりますが、他の付着生物と見分けが付きにくいのです。しかし、よく見ると2つの穴が空いています。触ると少し柔らかく、2つの穴を閉じる動きをするので、これはホヤの仲間だと分かります。

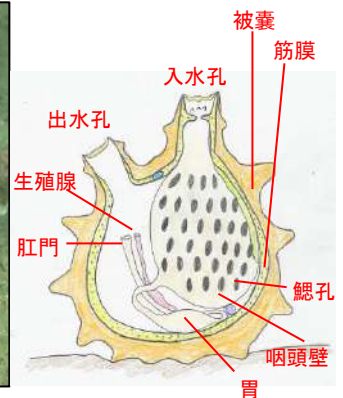


図1 マボヤとその断面

有機物はフィルターのような咽頭壁で濾され胃へ移動する。

～海に青いパンダ～

ホヤの仲間は、マボヤのような単体性で生活するもの（単体ボヤ）もいれば、無性的に増殖する群体性のも（群体ボヤ）もあります。

パンダツツボヤ（図2）は、色が綺麗で、浦富海岸ではよく見かける群体ボヤです。真上から見るとパンダのような顔をしているように見えるので、そのように呼ばれました。



図2 パンダツツボヤ

半透明の体とパンダの様な模様がある。

（裏面へ続く）

また、一生を外海で漂流生活をし、一見クラゲの様なホヤの仲間、サルパというグループもいます（図3）。浦富海岸では、春から夏頃に筒状の透明なサルパの仲間も見ることができます。クラゲのように毒のある触手しよくしゆは持っていないので、サルパと分かれれば、触れても問題ありません。



図3 海中を漂うモモイロサルパ

ホヤの様に口があり、パクパクと動かす。

～ホヤは魚の遠い親戚～

そんな固着生活や一生漂流してクラゲのような生活をするホヤですが、原始的な動物ではなく、魚や人間など、せきつい脊椎動物に近いことが分かっています。

受精した成体ホヤは、オタマジャクシのような形をした幼生を海に放出します。実はこのオタマジャクシのような幼生には、「せきさく脊索」と呼ばれる、器官を備えており、これは私たち脊椎動物が持つ脊椎とされています。この脊索は、幼生が固着生活を始めると消えてしまいます（図4）。

固着生活をしたホヤの子どもは、海中のプランクトンなどを食べて大きくなっていきます。群体ホヤの場合、そこから更にクローンを作って数を増やしてゆきます。浦富海岸の海を泳いでいると、ゴロゴロとした岩場や海藻の上にも群体ホヤが覆おおっているため、とても早く成長するのでしょう。

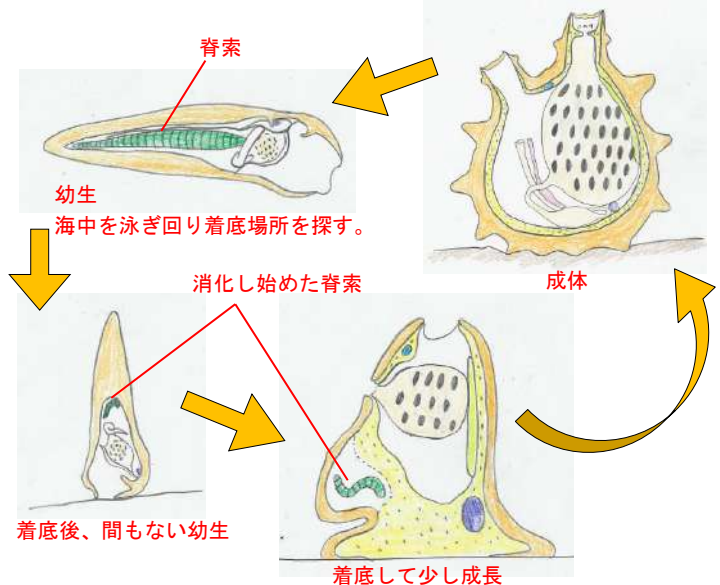


図4 ホヤの一生

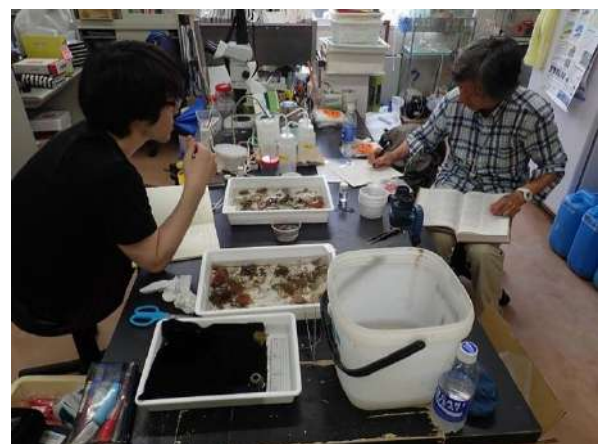
受精卵は成体の中でふ化し、脊索を持ったオタマジャクシ状の幼生が海中へ出る。魚の様に泳いで海底に着底した幼生はすぐに変態して、固着生活を開始する。群体ホヤの場合、更にクローンを作って増殖する。

生き方や外見が人間や魚から遠く離れているものの、実は私たちと近縁である動物がいるのも、海って不思議ですよね。夏休みの自由研究で困ったら、海に行き、ワケの分からない生物を探してみても、詳しく掘り下げてみてはいかがでしょうか？（太田）

作図参考：岩槻邦男・馬渡峻輔（監修）白山義久（編集）「無脊椎動物の多様性と系統」掌華房

ホヤの生物相調査を行いました。

6月17～23日の間に、国立科学博物館動物研究部客員研究員の西川輝昭先生にしかわてるあきと北海道大学理学院の長谷川尚弘さんはせがわなおひろを招聘し、浦富海岸におけるホヤの生物相調査を行いました。少なくとも30種以上のホヤが見つかり、学術的にも貴重な発見がありました。詳しい内容が分かり次第、紹介していきたいと思ひます。



収集したホヤの標本を調べる西川先生(右)と長谷川さん(左)